

---

# 2次元トリップ！

黒猫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

2次元トリップ！

### 【Zコード】

Z2819Z

### 【作者名】

黒猫

### 【あらすじ】

どこにでもいる普通の中学生、榎凜奈は

「家庭教師ヒットマンREBORN！」が大好きなヲタク。

ある日、リボーンの本を読みながら歩いていて「リボーンの世界にいきたいな！」なんて思いながら信号を渡つていると、信号無視のトラックがつっこんできた。妙に騒がしいな、と思いながら起きてみると・・・ツナの家の前にいた。

## 主人公紹介（前書き）

今回は主人公紹介です。

次回から、本題に入つていただきたいと思います。  
馴文ですが、見てくれると嬉しいです^\_^

## 主人公紹介

この小説は、「家庭教師ヒットマンREBORN！」の原作者とはいつさい関係がないものです。  
ご了承ください。

主人公・・・榎 さかき 凜奈 りんな

年齢・・・13歳（中学1年生）

身長／体重・・・153?／45?

性格

どこにでもいる普通の中学生。少年漫画が大好き。特にリボーン。

（ヲタク）

性格は明るいが、落ち込むと立ち直るのにやや時間がかかる。  
居合道や空手をならつてゐる。そこそこ強い・・・かも。  
成績は中間で運動は得意。

## 主人公紹介（後書き）

次回から更新していきたいと思います！

え、何ですかコレ？（前書き）

・・・書いていたのに全部消したところ最悪な事態（泣）  
あれ、保存つてどうするんでしたっけ。

まあ、とつあえず黙文ですがよろしくお願いします。

え、何ですかコレ？

『時間だよ。あと一分で支度しないと……ただじゅすまなによ？』

ピッ

携帯のアラームからなるアニメボイスを手でとめる。黒髪の綺麗なロングヘアが白無しの寝癖のついたかた。彼女は榎凛奈。

「起きますよー。雲雀さん でも、今日は土曜日だからあと一時間寝ても良いよねー。」

バンッ

ドアが勢いよく開いて、凛奈の母、薫が入ってくる。

「凛奈ー早く起きなさいー。今日はリボーンの最新刊の発売日でしょー。」

一度寝るとひびを阻止されたが、大事なことを忘れていた。

「そうだよー今日はリボーンの発売日だよー。」「だから、早くしないとなくなるわよー。」「うんー。」

田を輝かせながら着替えをする。

「それと凛奈。」

「何？」「

「そのアラーム、音小さくしなさい。」

「え、何で？小さいと意味ないじゃん。」

「・・・その、恥ずかしいからよ。」

「え～！雲雀さんの神ボイスだよ？イケボだよ？明日はツナにしようとおもっているのに！」

「・・・まあいいわ。早く準備しなさいね。」

「はい。」

薫はそういうと凛奈の部屋を出て行った。

「せつかあ、今日はリボーンの最新刊発売日だつたね～あはは～」

だらしなく頬をゆるめ、ニヘラ～と笑う。今の顔は結構危ない。

「つていうか、今何時だ？」

そういうて時計を見る。

「9時半か・・・。本屋は10時からだし、良い時間か。」

そうしてこりうつむきに服を着替え終えた。上は黒の長袖に胸元には赤いリボンがむすんでいる。

下はブルーのショートパンツに黒色のレギンスを履いている。

最後はブラウンのジャケットを羽織つて準備完了。

もちろん髪のセットも欠かせない。黒髪の腰まである長いロングヘア一は横に結ばれていた。

ドアを開いて階段をダダダッと駆け上る。ちなみに凛奈の部屋は階段をあがつてすぐ左のところにある。部屋はリボーンのポスターやパークー、Tシャツだらけで、一般人（ヲタクじゃない人）が見たら、引かれるだろう。

もともと、少年漫画なんか読まない凛奈だったが友達に勧められてリボーンを読んでみると、そのおもしろさに心を奪われた。

今ではB-Lも読めるほどだ。自称では「リボーンが無い世界では生きられない！」だ。

「じゃあ行つてきます！！」

「え、ご飯は？」

「いらない！リボーンが先よ！」

「はいはい、途中で倒れないようにね。」

「はい！行つてきまーす！」

「いってらっしゃい。」

スニークターを履いて玄関を飛び出る。すぐさまものすごいスピードで走る。

本屋まで20分ある距離をわずか10分でついた。

今の時刻はちょうど10時。

「はあ・・・はあ、間に合つたあー！」

乱れた呼吸を整えてから本屋に入る。

「いらっしゃいませ〜。」

店員の高らかな声が響く。しかし、今は店員に会釈をしている場合ではない。凛奈は、少年漫画の棚に移動する。すると、ポップな絵柄で「家庭教師ヒットマンREBORN！最新刊！」とかかっていた。

「あつたあつた！」

すべに手に取りレジに持つて行く。

「420円です。」

凜奈は持っていた500円を渡す。

「80円のおつりです。ありがとうございました。」

手に取ったとたん、走って本屋を出て行き、鞄の中におかれられたリボーン36巻をとる。

「うふふ～一家につくまで我慢できなーいし読んじやお～。」

しかし、これがいけなかつた。後にありえない出来事が待つてゐるなんて、いのときねえ思いもしなかつた。

そしてリボーンを歩きながら読んでいた。

「うわっ、うわっ、テイモン最悪ー、シナの骨がボロボロじゃんー。」

なんて呑気に歩いていく。そしてそのまま信号を渡る。まだ青だから轢かれる心配はない。

「よし、シナー、テイモンを倒せー。」

そんなことを言しながら歩く。

「お嬢ちゃん！危ない！！

漫画を読むことに必死だったため、そんな声に気がつかなかつた。

やがてパニックといつたるさい音が鳴り響いた後、気がついた。

「え・・・？」

トライックが凛奈めがけてつっこんでくる。

気がついたときにはもう、遅い。

凛奈はそのままトライックにはねられた。

（え・・・？何がおこなつているの？）

自分ではわからなかつた。ただわかつていたのは、通行人の「キャー」という叫び声と、救急車のサイレン。そして、

自分から出でている血の色だけだつた。

（あれ・・・。まだ信号青だよ？なのに何で・・・。あ、そつか信号無視つてやつ？あはは、私つて馬鹿だな・・・。リボーンを歩きながら読んでいたから気がつかなかつたんだ。）

そのまま宙を舞う。そしてそのまま地面にたたきつけられる。不思議と痛みは無かつた。

（あ～あ、私、死ぬのかなあ・・・。せめて最後はさ、リボーンの世界に行きたかつたよ。まあ無理なんだけどね・・・。）

そんな馬鹿げたことを思こながら、凜奈の意識はそこで途絶えた。

「・・・ わ、 オイ。」

「ん・・ んう～？まだ眠いよ～。」

「起きるつてんだよ。」

「ん～、うわあ～なあ～今日は休みでしょ～～もう少し寝たつて・・・

「だから起きるつてんだよ～変質者～」

「ちょ、獄寺君。相手は女の子だよ。」

「はあ？変質者って、え？あれ、獄寺と・・・シナ？」

「！？え、君、何で俺たちのことじつてんの～？」

「10代田一一下がつててください～他のファミリーの刺客かもしれません！」

「ええ！？ そんなあ～」

なんと田の前にシナと獄寺・・・そしてシナの家の前にいた。

## え、何ですかコレ？（後書き）

「…」今まで読んでくれてありがとうございます。  
本当は消える前までは長かったんですね（笑）  
でも消えて…  
…正直いうと氣力が…（泣）  
なんで消えたんだよ～！  
つていうか、展開早いですね…。

## 「IJRは2次元!-? (前書き)

また続きを書いていきたいと思います!

無事におわるといいなあ・・・。

「え、ちよ、え？？」

凛奈はパーン。やつやそつだ。田の前には獄寺ヒツナ・・・リボーンの漫畫に出でるキャラ

かいたのだから

「おー、やるアマ。何年をあがひ。」

— はいはい！

獄寺の言葉につられて思わず両手をあげる。

「……武器はもつていないよつだな。どうします？ 10代目。」

相手は女の子だし

2人で話し込んでいると、Juriをおすおずと手を挙げながらいつ。

「黙れ、アマ。

「えーその、私は決して怪しい者じや……。」

お仕事の名前で何がいいかお聞かせください。

本当になぜだろう。ただトラックにはねられて、気がついたり、こ  
にいたというだけだ。

そんなことは、とても信じるわけがない。

「やつぱり廢しにシスよ、10代目。どこかに縛り付けておきます

？」

「いや、だからあのね、獄寺君。相手は俺たちと年も変わらないよ。うだし、しかも女の子だよ？」

「しかし……。」

「ツナの言つてつづだぞ、獄寺。」

「リボーン！」

「リボーンちゃん！」

（え、あのリボーン！？）

あまりの状況についていけない凜奈は、ただボーッとしてるだけだった。

「とつあえず、ツナの部屋に放り投げてたらどうだ？・そのうちなんかはくんじゃねえか？」

「そうですね！・さすがリボーンちゃん！」

「ちよ、待てよー・リボーンお前何もわかつてないだろー。」

「本当だつたら、瞬殺決めていたところなんだから俺に感謝しろよ。」

「そこの女。」

「はっ！？・だから私は、怪しい者じやなにつて言つているのー・ただの道に迷える子羊ですー。」

あわてて否定する。

「と、とつあえず、上がりなよ。えーと……・今前は？」

「さ、榎凜奈。中学1年生よ。」

「へえ、じゃあ俺の1つ下か～。」

（知つてこますとも、ツナ……。）

ガチャとツナが玄関のドアをあける。

「あら、シッ君。もう帰ってきたの？早いわね～。」

「え、いやちよつと……。」

「あら、ツナのお友達？」

いきなりツナのママ」と奈々が訪ねる。

「いえーその、道に倒れていたところを助けていただいただけです！」

「え、そこの？大丈夫？」

「はー！何とか！」

「そう？ゆっくつしてこつてね。」

「はいー。」

そのまま2階のツナの部屋にあがる。入つたとたん獄寺が質問しはじめる。

「ああ、お前はどこ？のフタリコーだ？答えないといだいナマイトへりわすぞ。」

そうこつて、両手にダイナマイトを持つ。

「ひつー！獄寺君タンマタンマー。」

「わ、私の話を聞いてくださいーーー！」

そうこつて、リボーン、ツナ、獄寺が私に視線を向け始める。信じるかどうか、今はもうどうでもいい。私のことを話さなきゃ……。・！・

「その、私は……異次元からきたんだと思いますーーー。」

「思います？」

ツナが問う。

「は、はい。その自分でもわからないんです。だから確信がないけど・・・私は多分

「3次元からきました！」

「?3次元はここだよ？」

「えーと、その・・・こここの世界は2次元で私が元いたところが3次元なんです。」

「え?つまり・・・どういうこと?」

「つまり、2次元にトリップしたってことかもしれませんー多分。」

「た、多分なの?」

ツナがあきれたように質問する。

「だから確信がないんです！」

「で、でも俺たちの名前を知っていたのは何で?」

「それは・・・知っていたとしか言えません。」

「そうなんだ・・・。」

「その、信じてくれますか?」

「え?うーん・・・。」

私の言葉にツナは首をかしげる。

「まあとりあえず、信じるよ。俺たちの世界も信じられないようなことだしね。」

「それって、ボンゴレファミリーですよね?」

「うん、そうなんだ。あ、普通にため口でいいよ?」

「え、じゃあ・・・ツナ兄、で。」

「うん!」

凛奈がそういって、ツナは「うう」と笑った。

（天使だあああ！出血大サービス並の笑顔！…ふはあつ…）

凛奈は心の中で萌えていた。

「しかし10代目、このアマビツします？」

「榊…さんのこと？」

「あ、凛奈でいいよ。獄寺…隼人兄も。」

「なつ！お前に名前呼ばれる筋合いはねえつ…」

「まあまあ獄寺君。いいんじゃない、それで。」

「…10代目がそういうなら。」

「でも、本当にどうしよう。トリップしたなら【元気】家もないんで

しよう？」

「う、うん。学校も…。」

「そつかあ。」

「なら、家に住まわせたらどうだ？」

そこで始めてリボーンが口を開いた。

「え、ここに？でも、母さんが許すかなあ。」

「いいわよ～？ツツ君。」

「なつ母さん！？いつからそこそこ？」

そこには、いつからいたのか分からぬママンがたつっていた。

「ツツ君のお部屋を掃除しようと思つて…。邪魔だつた？」

「いや、そんなことはないけど、ここに住まわせて良いの？」

「いいわよ～かわいい女の子が住んでくれて母さんも嬉しいわ。」

「・・・か、母さん。」

さすがツナのママ。心が広い。

「それに学校も並中に通つたらいいわよ。ツツ君と獄寺君と一緒に。

「わうだけど・・・。」

「お母様！」

そこで獄寺君が言つ。本当になんでツナの前やママの前だと、いつも態度がちがつてくるのか。

凛奈は変なところで感心していた。

「年頃の男女が一緒に住まうつて・・・何か問題があるのでは?」

獄寺としてはもつともな意見。

「それは大丈夫だぞ、獄寺。」

「え、何でですか?リボーンさん。」

「ツナが女に手を出すなんて勇氣があると思わねえ。」

「な、ひどい!」

だが、実際その通りだらう。

「うーん、でも困つたわね。部屋が無いのよ。ツツ君、同じ部屋で良い?」

「はあつー?ランボとかの部屋はー?」

「それが、もう狭くなるのよ。わるいに決まっているんだよ。」

「は、はい?」

「ツツ君をよろしくね。」

「え、ええ、もちろん（？）です。」

「じゃあさつそく並中に転校手続きしないとね」

そうこうと部屋から出て行った。

「そ、そんな母さん・・・。」

「あの、『めん・・・。』

「え、いや、別にいいよ。あはは・・・。」

「おい、そこの凛奈とかいう女。」

「何、隼人兄。」

「10代目に手<sup>レ</sup>だしたら・・・ぶつ殺す！」

「わ、わかつたわよ！でも、とりあえずツナ抱きしめて良い？？」

「はあっ！？」

答えを聞かずに、バツと抱きしめる。

「本物のツナだあ！！かわいい！天使！」

・・・もともとリボーンラタクである凛奈はツナが現れてから抱きしめたい衝動を抑えていたため、

今、耐えられなくなつて・・・ゲージが爆発した。

「ちょ、神！10代目から離れろ！」

今さつきの落ち込みから、リボーンの世界にきたんだから、これを楽しまないと  
もつたいないという想いに変わっていた。なんとも前向きなプラス  
思考だ。

そんなわけで、ツナたちの生活が始まるのだった・・・。

「これは2次元!?」（後書き）

ちなみにこの小説、オチが全くありません!  
ビビビビビビしましょウ??

つていうかツナ、トリップつて簡単に信じるなよ（笑）

シナリオ#活一観、おじいちゃんがここにいる? (前編)

大丈夫なのか、この小説……。

では今回も妄想爆発でお送りしますーーー

今回も、全部消さないように注意しようとする。

シナリの出現一々、おなじくね～ナ～ツルねニシニの～

「えーと・・・凜奈、ちゃん。なんかジュース飲む?オレンジとグレープあるけど・・・。」

「ちゃんはいらぬから。」

「分かつた。今、持つてくるね。」

（・・・何の恋愛ゲームですか、コレ！――！相変わらず隣で私を睨んでくる  
「自称10代目の右腕」がいるけど・・・そんなことはどうでもいい！――この状況を  
楽しまないと！――）

あれから凜奈は少し話をして、今、ティーブレイク(?)中だ。  
落ち込みなど、ひとつひとつに吹き飛んで、この状況をヒーハー！  
真っ最中。

「おい、榊つづく変態女。」

「はあ！？誰が変態よ！自称10代目の右腕の隼人兄！っていうか名字で呼ぶな！」

「なつ！俺は自称じやねえ！正真正銘の10代目の右腕だあつ……」「まだ完璧な右腕じやないでしょう！？」

「 ししゃ！ 完璧な右腕だ！」

そこでツナが大福とオレンジジュースを3人分もつてきた。ちなみにリボーンは今、外出中だ。ちなみにママも凜奈の転校手続きをしに、並中へでかけている。

「ツナ兄、聞いてよつ！隼人兄が私のことを、「変態女」っていうんだよ！？ひどくない！？」

「本当のことじゃねーかつ！いきなり10代目に抱きつきやがつて！」

「ほほーう！隼人兄は、ツナ兄のこと好きだもんね！「ツナ命」だもんね！いいのよ？私に妬いても？私はBLもイケる口だから！別に引いたりしないわ！」

「なつ！BL！？確かに俺は10代目を好きだけども、その好きじやねえ！尊敬の意味をこめての好きだつ！！！」

「ふうん！あつそ！まあツナ兄に右腕と認めてもらえるよう、がんばる」とね！」

「んだとコラアツ！」

「ちょ、やめてよー一人とも！落ち着いて。ホラ、お菓子ももつてきただからー！」

（もお、最悪だよーなんか意味分からぬ女の子が住むことになるしー）

「ツナ兄が／10代目が／そういうなら・・・／そつおつしやるのなら・・・。」

「はあ・・・。とりあえず座りなよ。」

「うん・・・。」

そこで凜奈はオレンジジュースを一口、口に含む。甘酸っぱい。

「もう一人とも喧嘩しないでよ？ただえさえランボとか（獄寺君）で大変なんだから・・・。」

「はあーい。もとはといえば隼人兄が悪いのに・・・。」

「んだとおー？」

「はいはい、獄寺君！落ち着いて！」

「つ・・・分かりました。」

「とにかく、凛奈。」

「うん。」

ツナが凛奈に呼びかけた。何か質問とかあるのだろうか。

「こんな、のほほんとしていていいの? その、3次元? に戻る方法とか考えた方が……。」

「もつともな意見。

「うん、そりなんだけれど……。」

「つていうか、なんでこの世界にこれたの?」

「えと、その……横断歩道でトラックに轢かれたのよ~あはは。」

「ええ! ? 笑ってる場合じゃないよ! 今頃重症じゃないの? ?」「あはは・・・やつだよね・・・。でも、骨折びりか癌一つないし。」

「それはそれです! 」  
「いけど……。」

「うん、なんかさ。最後に死ぬんだつたら、ツナ兄たちの世界にいきたいなあつて思つたら、しつちの世界にきちゃつた・・・みたいだな? なんかパラレルワールドみたいだね。」

「パラレルワールドっていえば、百蘭たちのひと群れに出でるくな」となかつたけど。」

その言葉で凛奈は一つ疑問がわいた。

「あれ? ツナ兄たちはもつ、百蘭戦終わつたんだね。」

(あれ、でもアル「バレー」戦はどうなんだろ?。漫画の世界といこの世界つて、必ずしも比例はしてないってこと?)

「うん、終わったよ。」

「じゃあ、シモン戦は？」

「あ～炎真君のこと？」

「じゃあ、戦いは終わつたんだね。」

「うん。」

「じゃあ・・・アルゴバレーー戦は？」

「え？ アルゴバレーー戦？ 何それ。」

「あ、知らないんだつたらいいよ。」

（つてことは、この世界はアルゴバレーー戦が始まる前の日常編つてことか・・・。）

つまりは「」は漫画で「」、ギャグ的な日常編だ。凛奈は戦いの世界にこなくてよかつた、とほつとした。

「こじても、本物のツナにあえるなんて感激ーあ、ねえねえ雲雀さんもいるんだよね。」

「え、うんいるけど・・・。雲雀さん」に会いたいの？」

「うん！」

「あはは・・・あの雲雀さんに会いたいなんて物好きだね・・・。」

「つたくあのバトルマニアめ。」

「あはは・・・」

「まあでも、並中に通つことになつたらイヤでも毎日あえるからいつか！」

凛奈は「ふふふ～ん」と机嫌に口笛を吹く。もつ前の世界に未練などない様子だ。

「でも雲雀さんこあつて何するの？」

「ふふふ・・・それはね、雲雀さんの生ボイス「咬み殺すよ」を携

帯に録音してメールの受信音にするー。」

「ええ・・・。」

「あ、その前にツナ兄にやつてもりあつかな～」

「ええ！？俺はいいよ・・・。」

「じゃあ、嫌だけど隼人兄。」

「嫌だけどつてなんだよ！」

「しようがないでしょ！私の友達がすごく隼人兄が好きなんだから

！」

「なつ！俺は女共に興味はねえっ！」

「え？誰も女友達とはいってないんだけど？男友達なんだけど？何を期待してるのかな～隼人兄！」

「てめえっ・・・。」

「喧嘩しないで！」

また、喧嘩になりそうなところをツナにとめられる。そのおかげで口喧嘩にはならなかつた。

「みんな～仲良くやつてる？」

ガチャと無機質な音が響いてドアの方を見てみると、ママンがたつていた。

「はい、お母様！」

「母さん！何しにきたの？」

「あ、そうそう。凛奈ちゃんの転校手続きやつたからね～。」

「あ、ありがとうございま～す！」

「さつそく明日からだけど・・・大丈夫？」

「え、明日！？っていうか、今は何曜日？」

「え、今？日曜日だけど・・・。」

「マジ？明日からか・・・。あの、奈々さん。」

「うん？ママンでいいわよ～。」

「えーと・・・教科書を持つていなんですか?」  
「あ~。」

ママンが「大丈夫よ。」とこたえる。

「凛奈ちゃん、今中学1年生?」

「あ、はい。」

「ならツツ君の1年生のときの教科書貸してあげるわ。」

「ありがとうございます!」

「いえいえ、不便なことがあつたら何でも言ってね?」

「はい!」

なんと心優しいママンなんだろ?、私のお母さんとは大違ひ。と、  
凛奈が心の中で思つていたことは  
秘密だ。

「じゃあ明日からがんばってね。」

「はい!」

そしてせつねく凛奈は、ツナ兄たちが通り、並中に通りこんだ  
たのだ。

・・・いいのか凛奈。元の世界に戻ることを考えないで。



シナリオ#活一、アリスがハート城にて。（後編）

今回もあまつ前進しましたね。  
ぐだぐだですいません。

そのうち書きたいと思います。

では、じりめで読んでくださいね。がんばってください（>\_o<）

## 朝い飯（前書き）

この文章は作者の願望あふれる妄想ですが、おつきあいして貰えると嬉しいです！

では、どうぞ！

また展開が早いですが・・・。

## 朝い飯

チヨンチヨンと朝を告げるスズメの鳴き声がなり、凛奈は起きた。

「あれ・・・まだ、6時じやん。寝てよつと。」

時計の針は朝の6時ちょうどを指している。隣では、ツナの規則的な寝息が聞こえる。

それを見て、凛奈は感嘆の声をあげた。

「て、天使・・・そつだ、写真とりつー。」

完璧な変態行為だが気にしない。むわむわ、携帯を取り出し携帯のカメラ機能をたちあげる。

「ふふふ・・・構図はこいでつと。あ、ひょこ右かな。」

内心、「これを携帯の待ち受けにしよう!」と思ひつ凛奈。かしゃかしゃといろんな構図でツナを撮り・・・20分はたつた出あわいのとき、

「う、うん・・・。」

ツナが声をあげる。

(やばつ・・・起きしちゃつたかな。)

確認しそうとツナの顔をシンシンとつづく。だが、まったく反応がないため、起きていないようだ。

（ふ～、危ない危ない！）

てへっと舌をだす。

「今のは可愛くないな。」

自分で言つて余計にむなしくなる。そういうことがなければ、誰もが振り向く美少女なんだけど。

「じりじり・・・。田がわえぢやつた。・・・よしー。」

凛奈は何か思いついたようでポンシと手をたたく。

「ツナの寝顔を堪能しよう。」

うん、変態だ。

「つま～可愛いよ～！天使～！おほつまつげ長つ！」

顔が二へラ～と気持ち悪く歪み、凛奈が男だつたら大変だと思つて危ない。

「つまほ～・・・ハアハア・・・。」

そろそろ凛奈の危ない息づかいが聞こえてきたのか、ツナが田をつっすらと開ける。

田の前には凛奈の顔があつたため、ツナは大声を出した。

「うわああつーー。」

ツナは壁の方に向かって後ずさる。

ツナの声で作者も忘れかけていたリボーンも田を覚ました。

「つるせーぞ、ツナ。」

「リ、リボーン！ だつて、凛奈が・・・。」

「いいから黙れ！」

リボーンの蹴りがツナの鳩尾に当たる。

「ふげー」

あり得ない奇声をあげてツナは氣絶した。

「あ・・・氣絶しちやつた。」

「お前も早くねろ。」

「寝ろって言つたて・・・もう6時半だし。」

「俺はねるぞ。」

そうこうやこなか、リボーンは小さな寝息を立てて寝た。

「寝るのはやつーの 太より早いわ。」

あのの 太は枕があれば3秒でねれるしな、なんじことを考える。

「はあ、下行！」

凛奈はゆづくらたちあがり、ドアに手をかける。ツナたちを起しきなこよづくらと出て階段を

下つる。

そこには、こつから起きていたのがママンが朝ご飯の準備をしていた。

「あら、おはようおはなづ凜奈ちゃん。早いのね。」

「あ、おはようございます。」

「ツツ君はまだ寝てるかしら?」

「はい、気絶、じゃなくて・・・熟睡します。」

「そう。ツツ君たら・・・悪いけど凜奈ちゃん、お手伝いしてくれる?」

「あ、いいですよ。少し顔を洗つておきますね。」

洗面台に行く途中で、ランボやイーピン、ビアンキが寝てる部屋を通り。

(あ、そつか。ランボたちもいるんだよね。昨日は見かけなかつたけど・・・。)

それは作者が出すのを忘れてたのです。作者の心の中。

「えーと洗面台は・・・あつた。」

洗面台にたたずみ、温水を出して顔を洗う。今は秋なので、このぐらいの温度が丁度よかつた。

「ふはつ・・・。」

顔を洗つてすつきりする。だが顔の突つ張り感があつたので、いつも所持している乳液をぬる。

ちなみにここに持ってきた所持品は、携帯、財布、リップクリーム、ハンドクリーム、化粧水、

「 亂液、ブラシ・・・など、他にもこいつはある。やむむすが女のはじこみに必要な物は、身だしなみに必要な物は、しっかりともつてこようがだ。」

髪を「ワクシ」でとかして、「コム」で横に結ぶ。

「 できたら～つと。」

まだ、寝巻き姿のままだが、ママンの手伝いをこいつでコピングに戻る。

「 何の手伝いをすればいいですか？」

「 ん～そうね～みんなの分のコップとかお箸を並べてくれる？え～と、凛奈ちゃんを入れて

「 2人分かしら。」

「 え？ ママンの分は。」

「 あ～私は後で食べるからいいのよ～。お願ひね～。」

「 はい～！」

ママンに言われた通り、箸やコップを並べる。そのぐらこの準備は簡単ですぐに終わってしまう。

「 できました。」

「 ありがとう。じゃあ、みそ汁とかご飯をよそつてくれれる？～。」

「 はい～。」

みんなの分を次々とよそつしていく。これもあつとこうまで終わって、次は卵焼きとか魚とかがおこしてある目を並べた。

「ありがとう、こつもよつ早く終わつたわ。」

「いいえ、これくらいは当然です！」

「うふふ、ありがとね。あ、そつそつ凜奈ちやんは準備は大丈夫？」

「はい、昨日のうちにしときました！」

「さすがね～ツツ君たら毎朝遅刻して大変なのよ～。」

「あはは・・・。ツナ兄らしいです。」

（知つています・・・。）

「今は7時ね。そろそろツツ君を起こさなきやね。」

「あ、なら私が起こしてきます！」

「そう？ ありがとね～ランボ君たちは私がおこしとくから。」

「はい！」

そう言つた後、ツナの部屋に戻る。

ツナのベッドに近づき、そおつと顔を見る。

「ツナ兄～起きて～！」

「う～ん・・・あと5分・・・。」

（この可愛い寝顔をもう少し拝みたいが、今は心を鬼にしなきやつ！）

「ツナ兄～起きろ～雲雀さんにはみ殺されるよ～。」

「あと5分・・・。」

「起きろ～～遅刻するよ～。」

「う～ん・・・。」

ツナはそれきりムニヤムニヤとまた、寝息を立てるばかり。

「お、起きない・・・。」

「任せや。」

「え、リボーン～。」

いつから起きていたのか、リボーンがベッドにひざとたつていた。

すると、レオンが大きな金槌になつておひそひせ、一トントと表記されていた。

「え？ リボーン……。それ、やっぱいんじや……。」

凛奈が止めるのも聞かず「それ」について金槌を、而、レオンを振るつ。

凛奈はとつやに皿をつむる。

「ドンッ」と音が響き、シナの「あああああああ！」とこの断末魔が聞こえる。

「いってえ……リボーンお前なあ！ もう少し手加減つていうのを…」

「「つむせー、早く朝ご飯たべないと遅刻しちまつや。」

「へ、今何時？」

「今？ 今は7時10分だよ？」

凛奈が答える。

「なんだ、もう少し寝かせりよ。」

「だめだ！」

そうこうでリボーンはシナの手をひねりあげる。

「いででででつー。」  
「あはは……。」

「うしてなんとかツナは田を覚ました。

下に下りると、もうみんながそろっていた。

「ツナ、遅いんだもんね！」

ランボが挑発したように呟つ。

「はいはい・・・。」

ツナは適当に流す。

「 今田はいつもより早いのね、ツナ。」

ピアンキが呟く。

「ツナ、横の女誰？」

（あ、そつか、私が知つてもランボたちは知らないんだ。）  
「凛奈ちゃんはね、昨日から住まつ」とになったのよ。仲良くな  
てね～。」

ママンが軽く紹介する。

「初めまして、だね。私は榎凜奈。よろしく……今言つのもなうござなー。」

「ふう〜ん。凛奈〜遊べ〜！  
「ラノボ今ざめ！う食事中！」

「ランボ今だめーお食事中！」

「イーピンがランボをたしなめる。

「凛奈もチコウガツコウしてといふ行くの~?」

「ランボがじ飯を食べながら訪ねてくれる。

「うん、やうだよ。ツナ兄と一緒にいいく。」

「ふう~ん、あつや。帰つたら遊んでくれる~?」

「う~ん、暇だつたらね。」

「嫌だもんね! ちゃんと遊べ!」

(よ、予想以上にウザイ!~)

凛奈はそういうことを我慢して「また後でね」といふ。

「凛奈、かまわなくていいよ。」

「あはは・・・でも小さこ子だからしつくあしりえなこよ。」

「あらのひ~凛奈~? われつちは小さくないもんね!~」

「あはは・・・。」

やひよ、適当にあしりひいていた。

「うわわわわわ~!」

ツナが食べ終わると同時に凛奈も食べ終わる。

「私も! おこしかったです!」

「よかつたわ~。」

そのとおり、ランボーンとチャイムがなる。

「あ、たぶん獄寺君だ。」

「げ・・・隼人兄か・・・。」

「じゃあ、行つてきます！」

「気をつけてね～。」

タタタッと凜奈とツナは玄関に向かい、ドアをあける。

「おはよひ～ります！～0代田～。」

「お、おはよう。獄寺君。」

「・・・おはよう。隼人兄。」

「げつ～わきやがつた！」

「何よ～！その虫がでてきたような言い方は～！」

「まあまあ二人とも！獄寺君も挑発しないで～！」

「すみません・・・。」

「怒られてやんの～！」

「てめえつ～！」

「ストーップ～！」

そこで二人とも黙る。

「朝つぱらから喧嘩しないでよ。ほら行こ～。」

「はい～。」

「うん。」

無事友達ができるといいな、と凜奈は思いながら学校へ出かける。

「見て～ツナ兄～ツナ兄の寝顔写真～。」

「げつ～いつ撮つたの？それ～！」

「今日の朝！」

「てめえつーーー代田のお美しい寝顔を無断で撮るなんてー！」

「へへーんーーうらやましこいか！」

「んだと、コラアッ！」

そんな他愛ない会話・・・といつか喧嘩をしながら並中へ向かう  
人だった。

## 朝い飯（後書き）

今回本当は並中まで行くつもりでしたが・・・。  
また次回にしますね！

では、読んでくださって感謝です！

感想・アドバイス等などあつたら、書いてくれると嬉しいです！

これ、並んでー。(禮書き)

やつと並んで行きますー。

オッキヤラガ出しますよ( <○> )

わー、今回わあくねあくね想ワールドにおつきあうこーだれこーまー。

## これ、並中へ！

キーンゴーンカーンと、並中のチャイムがなる。凛奈はツナたちと分かれて、今日から新しいスタートをきのうとしているクラスの前の廊下にいる。

担任は、HRをしてくるようドアの向こうから連絡事項等などを話しているのが聞こえる。

先生は、「入ってきて」と言つたら入ってきてね、と笑顔で言つていたが、いつこいつその会図がこない。廊下に立つ」と早10分。この先生は、話が長いのか、なぞと思つていると

「入ってきてください。」

と、先生の声が聞こえた。あわてて床においていた鞄を持ち、ドアを開けて教室に入る。

緊張していたからか足下がぎこちない。

よつやく教卓の前にたつと先生が紹介し始めた。

「中途半端な時期だが、転校生を紹介するわね。神凜奈さんよ。神さんからも一言お願いしていい？」

「は、はいーえーと・・・神凜奈といいます。家庭の事情（異次元の事情）で

「今日から並中に通うことになります。よろしくお願いします！」

軽くお辞儀をして先生に指定された席へ座る。隣の男子が「俺、藤

崎原。よ、よろしく。」と顔を赤めながら  
言つてきただので、「いらっしゃい。」と笑顔で返す。  
その仕草にまた男子生徒は赤らめる。凜奈は無自覚?だが、可愛い、  
とこりうより美人なのだ。

「さて、じゃあ1時間田の準備をして待つよ!」。

先生の声でみんなは、準備を始める。

（何といふか・・・、静かだな。当たり前だけど。）

はあとため息をつき、1時間田の準備をする。1時間田は国語だそ  
うだ。

「国語・・・つと・・・。」

教科書とノートを取り出す。もちろんそれは元ツナの物なので「沢  
田綱吉」と名前がバツチリ  
書いてある。それに気づいた隣の藤崎は、「沢田綱吉?」と訊ねて  
きた。

「へ?ああ・・・うん。私、2年のツナ兄、沢田先輩の家に住んで  
いるから。」

「ええつー?あのダメツナと言われる沢田先輩の家に!?」

その声が大きかつたのか、いっきに視線が集まる。

「あつ、『めん。』

「いいえ。でも、ダメツナは訂正して欲しいな。」

凛奈に笑顔で言われたらうなづくしかない。

「ツナ兄はね、とても優しいんだから！」

「そ、そなんだ……。」

凛奈は、ツナのことを1から10まで教えてあげたかったが、場所が場所なのでやめることにした。

ツナの笑顔とか笑顔とか笑顔とか。（大事なので3回いつ。）

まず、引かれないかが問題だ。

そんなこんなで、1時間目が終わり、2、3、4時間目の授業も終わつた。

みんなは、思い思いの場所で弁当を食べに行く。

そのとき。

「榎さん、俺と一緒に食べない？」

次から次とくる主に男子の要求を断りツナのいる2年A組にいくことにした。  
もちろん場所がわからないので生徒に聞く。

ツナのクラスの前で、「ツナ兄～！」と手を振る。

他の生徒も「あの綺麗な子、誰？沢田の友達？」とヒンヒンとはなす。

ツナは照れながらきた。

「ど、どうしたの？凛奈。」

「お皿、一緒に食べれないかなと思つて。」

「あ～いいよ「お前なんかと10代目が一緒に昼飯食うなんて俺がやるやうやねえ！」

セレヒヂウムセイイ獄寺がきた。

「どうしたんだ、ツナ。」

山本も来る。山本も凛奈に気づいたよつて、「1年坊か? どうしたんだ?」と聞いてくる。

(ほ、本物の山本だ!...背高つ...)

内心凛奈は興奮していた。

「あのね、山本。」の子は昨日から俺の家に住むことになったんだ。

「へえ～ツナん家にか?」

「う、うん! あなたは山本武さんね? 以後、武兄と呼んでもいいかしら!」

「お? いいや。」

周りの山本ファンが嫉視のまなざしで凛奈を見るが、そんなことをお構いなく普通に接する。

「あ、ツナ兄。雲雀さんは?」

「え、雲雀さん? あ・・・。」

「そつかあ、残念。」

「あははっ! 雲雀に逢いたいなんて物好きだな!」

脳天氣に山本が笑う。

「つるせえ野球馬鹿！」

「あははっ、獄寺はいつもそれだな！」  
「けつ。」

「あ、それよりお前の名前は？」

「あ、自己紹介が遅れたね。私は榎凛奈。凛奈って呼んでもらって構わないわ。まあ、お好きな呼び方でそぞうわ。」

「そうか？じゃあ、榎で。」

「うん！ツナ兄は凛奈ってよんでもるけどね。」

「凛奈がそう呼べって言つたんだろ。」

「10代目、こんな変態女に名前なんか呼ぶ価値ありませんよー。」

獄寺が悪態をつく。

「何ですつて、隼人兄！！」

「てめえは、10代目のストーカーなくせにー。」

「私はストーカーなんかじゃないわ！ツナ兄を深く愛する一少女よー！」

「てめえが10代目に好意をよせる資格なんぞねえー。」

「じゃあ隼人兄には右腕の資格はないねー！」

「なんだと！？」

「まあまあ獄寺君ー落ち着いてー！」

「あははっにぎやかなのなーー。」

そのときにがらがらと扉がひらく。

黒い学ランに肩には鳥。

「君たち、つるせこよ。咬み殺されたいの？」

「そ、そ、まあしきあの風紀委員長、雲雀恭弥。雲雀がきただけで、周りは凍り付くよ！」一くんと静まりかかる。

「本物の雲雀さんだあ……」

そのとき、なんとも空氣の読めない凛奈が発した言葉によつて沈黙は破られる。

「私、雲雀さんのファンなの……これから恭弥兄と呼ぶね！」

あはは～と、なんとも恍惚とした表情を浮かべる。

「君、誰？見かけない顔だね。」

「あ、今日から転入してきました！神凛奈です！」

「ふーん、そ、そ、」

そういうと、きなりトントンファーを振り下ろしてきました。凛奈はひとつそれにそれを受け止める。

「……」

本編では、まだ書いてないが、凛奈は居合道と剣道を習つてゐる。1年生のわりには強い。

「さすが、恭弥兄！スキがないね。」

「ワオ……君強いの？」

「さあ、自分では分からない。」

「！」と笑顔で言葉を並べる。

「ちよ、雲雀さん！相手は女の子ですか？」  
「そんなこと関係ないよ。それとも群れてる君たちから咬み殺そうか。」

「ひいつ！」

「雲雀つてめえ！」

גָּמְנִיתָן

わたわたりと雲雀を落ち着かそうとする山本。

「恭弥兄と戦つたら大変なことになるから、やつぱやめた。」

凛奈の声が響く。

「それより恭弥兄！あなたの声、録音させてくれない？」

「げつ！ 凜奈、お前マジだつたのかよー！」

「うん、そりだよ？ やつぱり元の世界に帰つたら、友達に伝喰した

しもの！」

「うんー、咬み殺すよって言ひてもいいんじゃないーー?」

「嫌だ。」

おれつと断りれる。

「・・・何で。」

そう質問するも、雲雀は帰ってしまった。

「ふう、雲雀さんを怒らすと大変な」ことになると「だつたよ～！」

涙半分にツナは言ひ。

「かみ殺すつて言つてくれなかつた……。」

「あはは……。」

凛奈はしょぼーんと肩をすくめる。

「元氣だせつて!なんなら俺が言つからー。」

「本当ー?」

ツナの言葉に凛奈はパアツと目を輝かせる。

(言わなければよかつた……。)

ツナは内心後悔する。

「じゃあね……、お嬢様、メールが届きましたよ、つて言つてくれーー?」

「え……、無理かも……。」

「やつてー!」

「……はー。」

「10代目ー!」このことなんか無視してーーーすよー。」

「いやあ、でも……。」

「わくわく、ドキドキ!」

「言葉で言わないでー!」

仕方ないと、一言息を吸い込み……

「お、お嬢様、メールが届きましたよー?」

「・・・何、それ。」

「へ?だから・・・。」

「届きましたよー?ってなこ。落ち着いて言つてよ。とんなおしー。」

「ええ!そんなんあー!」

「私が満足するまでやめない!」

「てめえつ、調子のりやがつてーー!」

「何?じゃあ、隼人兄がやつてくれんの?」

「!?

「でも無理だよね。低脳だもんね!」

「ふざけんじやねえ!やつてやらあ!」

「ふうん、あつや。じゃあやつてみてよ。」

凛奈の隈こまんまとはまる獄寺。まるで小学生同士の喧嘩だ。

「おい、お嬢!メールがどじきやがりましたよーー!」

「ボツー!やっぱ猿ね!なによ、お嬢つて!しかも届きやがりましたあ?低脳ー!」

「なんだと?」

なんだかんだで言つては続き、結局良こものははとれず、しかも弁当まで食べれなくなる始末だつた。

そしてこの二人は帰りまで言つてはをし、ツナの神経がどんどんすり減つていふことになつた。  
まだまだ、ツナの苦労は続きそつ・・・。

これ、並中へー（後書き）

授業とか作者が頭悪いのでござしまして（笑）

今回は、中途半端に終わりました・・・。少しアイディアが浮かばなかつたので・・・。

では、また次回にお会いしましょうーー。

Arrivederci!

## シナの新作（前編）

今回も、妄想爆発でお送りします！

つていうか、並中で了平を出すのを忘れてました・・・  
この小説、どうぞに思いついた小説ですからww  
そして、獄寺のキャラが少しづれてます（笑）

では、どうぞ～！

## ツナの苦悶

「はあ～・・・疲れた。」

ツナの一言で、獄寺は心配そうに顔をのぞき込む。

「大丈夫ですか？10代目。」

「うん、何とか・・・。凛奈がきてから1日しかたってないのに、俺の神経がどんどんすり減っていく・・・。」

「ちょうど今さつき、「私、本屋に行くから一人とも先帰つて！」

と凛奈は一人を放置し、本屋に出かけていった。

そのため、ツナは自分の本音を凛奈に聞かれる心配はない。最も、そんなことを聞いたら凛奈は悲しむ。だが、そんなに甘くないぞ凛奈は。

「つたぐ、あの変態女。10代目の手を煩わせやがって！いつか果たす！」

「待つて待つて、獄寺君！もう何回言つたか分からぬけど相手は女の子だから！」

「しかし10代目、あのままじゃ変態女は調子に乗つて・・・。」「いい加減獄寺君、変態女はやめようよ。それと盗聴器とか、カメラで録画、なんてされないうちはよっぽどマシだし。」

「だって、10代目の寝顔なんか撮つていたんですよ！？痴女です！」

獄寺の言葉で、通行人たちが振り向く。とくに「痴女」の言葉で。

「わあっ！ 獄寺君、声大きいつてー。」  
「す、すみません。」

獄寺は謝罪をし、また言葉をつなぐ。

「しかし、10代目の世界に通用するお美しい寝顔をお金も払わないで撮るなんて、うらやま・・・」「ホン！ 許さねえっ！」

「あれ、獄寺君。いま自分の本音おつとしたりよね？ つていうかお金とつたらもう趣向かわっちゃつからー。」

「とにかくですね、俺がしつかり10代目を命にかえてもお守りします！ あの変態ストーカー女がもしも、とこりときもありますしー。」

「大丈夫だよ、凛奈は普通の女の子だし。（俺の寝顔さえとらなければ。つていうか何気にしてストーカーっていう言葉がつけたされてるし・・・。）」

「・・・10代目がそうおっしゃるのなら。」

そんなこんなで、いろんな話をして、ツナの家についた。

「獄寺君、あがつていかない？ よければ、宿題も教えて欲しいな・・・なんて。」

「はー、よろこんでー。」

「じゃあ、わっそくあがつてー。」

「はーー。」

玄関に入り、靴をぬぐ。ソリでママンがでてくる。

「ツツ君、おかげり。あらー獄寺君も・・・。いつもありがとうね。ツツ君の勉強教えてくれて。」

「いえ、お母様！10代目のサポートは俺の役目ですから…」

「ふふ、そう？じゃあ、後で紅茶でももつていくわね。」

「はい…」

階段を上り、ツナの部屋に入る。

そのとたん、ツナは叫び声をあげる。

「ひい…！凛奈！？お前、本屋にいってたんじゃ…。」

「…うん、行つてきたよ。そして先回りして、ツナ兄たちを驚かそうと思つて。」

そこには凛奈がいた。自分の靴を持つて。

「でもね、ツナ兄…私、聞いたやつたんだ。」

「へ？何が？」

「ツナ兄が…ツナ兄が私がきたせいで、神経がすり減るつて…」

「当たり前だぜ、変態ストーカー女。」

獄寺がスキなく罵声をあげる。

「ひどい、隼人兄！隼人兄は、猿で低脳でムカツク野郎だけど、根は優しいかもつて思つていたのに！」

「それ、けなしてんのか、ほめてんのかわからんねえよーせめて、根は優しいうつて言い切れ！変態ストーカー痴女！」

「痴女！？ひどい！ひどいよね、ツナ兄！」

「…つていうか、どうやつて盗み聞きしてたの？」

「へ？それは盗聴器で…あ、しまつた！」

「盗聴器…どこにつけたの？」

「それは…ツナ兄の下半身。」

「わざわざ卑猥な言い方すんなよ、変態ストーカー痴女盗聴器野郎

！」

「ポケットにつけたの？」

「クツと首を立てに振る。

「つていうか、隼人兄ひどい・・・。」

「盗聴器をつけられてることも気づかないで、ツナやられたな。」

そこにはじからともなく、リボーンが現れる。

「リボーンー？」

「盗聴器を渡したのは俺だぞ。」

「元凶はお前かよつ！！！」

「だつてだつて丁度良いストーカーグッズだな、と思つたんだもん！」

「可愛く言つてもダメ！つていつかお前がストーカーなんかすんのか！？」

「俺じやねえぞ。凛奈だ。」

「・・・凛奈。」

「てめえ！」この変態ストーカー痴女盗聴器パンツ盗み野郎！」

「聞くたびに、一語ずつ増えて言つてるのは気のせいだと思いたい！つていうか、まだパンツは盗んでないもん！これからしようと思つてしていることだもん！」

「するのかよーーー！」

ツナの激しいツツコキ。内心ツナは「もう一人、ツツコキ役がほしい。」と思つている。

「もう最悪だよ。凛奈、今お前が持つてゐる俺の写真とか全部出して。

「ええ！なんでー家宝にしようと思つてこるの・・・。」

「やつらのがよー玉つーー！」

גַּעֲמָה

済々承知し、今持つているのを全部だす。

「・・・俺の着替え写真15枚、俺のシャツ2枚、俺のズボン1枚、俺のパークー1枚、・・・俺の使用済みストロー2本・・・無くなつてるとと思つたら。」

そこでツナは一区切りおく。

「それと、ハヤ。ハレ何?」

「それはツナ兄の鼻血出血力サ一ヒノ立のお風呂の写真。これはい  
い構図でとれてると思わない?」

思わないよ。」と、うかうか思ってたの」「

「ロード」は「ノーマル」の略語

「10代目のお風呂・・・着替え・・・ブハアツ！！」

とつぜん獄寺が鼻血を出しながら気絶。獄寺はログアウトした。

「え！？ 獄寺君！ 獄寺君つたら！」

「あはははーーー！ ツナ兄の着替え写真みて興奮してるしー。」

笑ひ事り なむ にかく作のべ ひのひ 立羽力せかひ

獄寺をシナのベジダに寝かせる。みつともなこと鼻にティッシュつめて。

「はあ・・・・。盗聴器とかカメラで録画とかされないいうちはマシだ

と思つてたのに・・・。」れ没収！「

「ええ！そんなんあ・・・。」

「そんなんあ、じゃないよ！もう俺、寿命が縮んでいくのが自分でも分かる。」

「・・・すいません。」

「以後、こんなことしないでよね！？」

「はあい・・・（多分・・・）」

「つてことで・・・今何時！？」

「へ？今は4時だけど・・・。」

「あつ宿題しなきや！獄寺君、悪いけど教えて・あ・・・。」

そう、今は獄寺は氣絶中だから教える人はいない。肝心の家庭教師様もどつか行つた。

「凛奈・・・分かる？」

「分からぬよ。中2の問題でしょう？」

「うわあん！！」

それからツナは2時間たつても1問も解けることはできず、刻々と時間が過ぎていくだけだった・・・。

「愁傷様、ツナ！！

## シナの苦惱（後書き）

そういえば、リボンの当選発表が明日でしたよね・・・。

私も参加申し込みしたんですが、当選するといいなあ・・・。

では、また次回一いつか、暇なのでまた今日中に更新するかも  
です。多分！

おひらくへ田田・・・（謹慎）

・・・土田遊びせつけてました！  
更新でわなくてすみません・・・！

では、初めて行きたいと思います。  
(余談ですが、リボト当選しました)

「ああとへ田田・・・

「ああ、もう最悪ー！」

ツナの第一声で始まった。

「ど、どうしたのツナ兄。」

「どうしたもこうしたもなーよー今日は散々だつたー！」

今は、タジ飯も食べてツナの部屋でくつろいでいるがツナがお風呂から上がりて入ったとたん、第一声がコレだ。

「えーと、私が、ツナ兄の所持品盗んだからー、『めんねーつー、でき』じいで・・・！」

「・・・。」

「え、何よーその、虫を見るよつな田はー！」

「・・・はあ、それもあるけど、宿題が終わってない・・・。」

もう一度、ツナは深いため息をつく。

「情けねえな、ツナ。」

そこでリボーンが口を開く。

「俺が、終わるまで付き添つてやるゾ。」

「ええ！ 嫌だよーリボーンは俺が回答間違えると、すべて爆弾ぶつぱなすしー！」

「俺はスバルタだからな。」

「はあ・・・こんな家庭教師ヤダア・・・。」

「じゃあ、ツナ兄。隼人兄に教えてもらえばいいじゃん。」

そう言つと、ツナはまたため息をこぼす。

「・・・獄寺君、理論指導だから・・・なんて言つんだろう。なんか・・・理解しにくい・・・。」

「あはははは！確かに、隼人兄つてそんな感じだよね（漫画ではおなじみだけど・・・）」

「うん。でも、獄寺君、外見はああだけど、頭はいいんだよね。」

「・・・なんかムカツク！頭も良くてルックスもよくて運動神経もいい・・・。はあ・・・。」

それこそ不思議よ。隼人兄、存在自体が不思議。外見は不良なのに頭はいいとか、

隼人兄自体がU M Aだわ。」

「あははは・・・。」

ツナが乾いた笑いをこぼす。

「はあ～宿題どうしよ・・・。」

「また振り出しね・・・。見せてよ、ツナ兄の宿題。」

「うん、いいよ。・・・。はい。」

そう言つて、ツナはプリント一枚渡す。そのプリントには解いた問題が1つもなく、消しゴムの痕しか残つてない。

「あ～2年生つてこんなのは留つんだ・・・。」

「うん、数学とかすごく難しいよ・・・。」

「へえ～・・・。」

そこには凛奈には意味がわからない数式や、問題がある。見ただけで目がチカチカするぐらいだ。

「うわ、ほんのやらなくて良いよ！子供は遊びが本業だ！誰だ、子供は勉強が本業だとか

ぬかしてたヤツ。いきてたら私が殺すわよ…」

「ちょ、怖い怖い！でもしようがないよ、勉強しないといけないんだから！」

「ツナ兄は真面目だね…でも、頭悪い…」

「うう…」

「で、でも、頭悪くても、人間中身よーほら、ツナ兄は優しいし頼れるお兄さんって感じ！？」

「あはは…フオローありがと。」

「でも、ツナ兄。今から宿題しても間に合つかな？今、9時だよ？」

頼りのリボーンは寝ちゃった

し…。

「

凛奈の隣には空中でホックをつらし、鼻提灯をしながら、ぐつすり寝ているリボーンがいる。

「げつ！ 本當だ…。解けなかつたら嫌でも、リボーンに聞こうとしたのに…。」

涙まじりにツナは言つ。

「もう今日は諦めて、明日、隼人兄に教わればいいよ…」

「獄寺君にかあ…まあいつか。じゃあ寝るまでゲームしようつと。」

「あ、いいなあ！私もやる！」

「うん、いいけど、凛奈は宿題終わったの？」

「うん、終わつたよ。」

「早ーいつのまに・・・。」

「まあね じゃあ始めよー!」

「う、うん・・・。」

ツナ兄は一本のカセットをとるとテレビゲームの本体に差し込んだ。チャララ～と陽気な音楽が聞こえてくる。

「・・・リズムゲー?」

「うん、太の達人つて知らない?」

「いや、しつてるけど・・・。」

「ならはじめよっか!」

そう言つと、太鼓と棒を凛奈にもたせる。

「曲、どれにする?」

「うーん・・・えーと・・・。」

悩んでこると、ある一曲の曲に田んづいた。

「あー!初音 クの初音 クの消失があるじゃんー!」れやろー!..

「え、コレ?でもコレ、難しいよ?」

「いいからいいから」

そう言つて、初音 クの曲を流す。

『僕はうまれそして氣づく』

音楽が流れてくる。最初はとても速い。

ダンダンダンダンッヒリズムに合わせ太鼓をたたく。確かに難しいが、凛奈はあまりはずしてない。

「どうやああああー！」

よく分からぬ奇声をあげ、最後のパートに入る。

「ドンドンドンドンッダドンッドドドンハダダンッ！」

太鼓のつむれい音だけが部屋に響き、ようやく終わる。

「凛奈、すういね……。」

画面をみたツナは安然とする。ミスは10回しかなくて、ハイスクアだ。

ちなみにツナは、84回もミスをしていた。

「へへーん！ボカ　の曲には命かけてるからねー！タクの見せ所よ！」

「あはは・・・んな大げさな・・・。」

ツナは「し」を連発して良い続ける。

少し、凛奈は誇らしく思う。しかしその態度が何気に腹が立つ笑顔だ。

「すういなあ～じゃあ、次は負けないぞ！」

「望むところー！」

それから勝負になつていき、いろんな曲を太鼓で奏である。

凛奈がつせつせきに勝つていき、凛奈が6勝1敗、ツナが1勝5敗となつた。

「うわあ、凛奈強す、あらゆ〜。。。

「へへつーまあね」

「今日は疲れたから、また明日にしない?」

「え〜ーもつとやりたいよー!」

「だつて、ほらもう10時だしー寝たほうがいいよ?明日おきれなくなるからー」

「ふ〜・・・分かったよ。」

口を尖らせながらも、渋々承知する。

凛奈のぶんの布団をひき、明かりを消す。・・・結構ひるとかつたのに、リボーンが起きないのが不思議でならなかつた。

「じゃあ、おやすみー。」

「おやすみー。」

ツナがあことつを言つと、すぐに寝息をたてて寝てしまつた。

(寝るのはやつー・・・天使のような寝顔をみたけど、今日は我慢我慢!私も今日は寝よつと)

少し、変態的な発想をしたが、すぐにそれはツナに怒られると思い、やめた。

どうやら理性が勝つたようだ。

それから、まぶたを閉じる。

明日はどんなことが起きるのだろうか。そんなことを考えながら眠りについた・・・。

かへりへ四三三・・・（後書き）

プリントの内容は書ませんでした。なにせ作者は一年生ですから  
ww

・・・なんかゴメンナサイシッ！

そして、小説が短い・・・。すみません、おもこいつをませんでした  
あ！

また近いうちに骸とかだしますんで、それでも許してください

ー）m

では、また次回お会いしましょー！

帰るための会議とかなんとか。多分前編。（前書き）

皆様のおかげで10000PV突破しました！  
こんな小説を見て頂きありがとうございます！  
もう、感激しておたけびをあげてしまいました

では、どうぞ！

帰るための会議とかなんとか。多分前編。

「・・・何、コレ?」

はたまたツナの一聲で始まる。

確かに、何コレと言わんばかりの光景が目の前には広がっていた。  
「何つて、ツナの守護者たちだゾ。」「いや、守護者じゃないし。先輩たちだし。・・・っていつか何でみんなここに集まってるの?」

ツナの質問に各自答え始める。

「10代目、俺はリボーンさんにして言われたからきたんですけど・・・。」「ハハツ俺は、なんか話し合いで始めるとか言われたか?」「極限、今から何を始めるのだー?」「・・・僕は赤ん坊に頼まれてきてみたんだけど・・・」今まで群れてるなんてね・・・。咬み殺されたいの?」

雲雀がトンファーを構える。

「ひ、雲雀さん!」「俺たちですからトンファーしまつてください!」「まあまあ、雲雀。」で耐えたら俺がいつでも相手してやるぞ?」「・・・本当かい?赤ん坊。」「ああ。」

リボーンが答えると、雲雀は意外にも素直にトンファーをしまった。

「クフフ・・・マフィア風情が僕を呼び出すなんて。」

「つて、何気に骸もきてるしー今更だけど雲雀さんと骸が会つたら  
やばいんじゃ・・・！」

「大丈夫だぞ、今回は喧嘩するのはやめないとお願いしたからな。」  
「そつか、よかつたあ・・・。」

安心するツナ。

「で、ランボは？」

「あいつは邪魔だからな。」

「あははははは・・・。」

モヒで、ツナはある」と元気で。

「といひで凛奈は？」

「ああ、なんか、リビングで漫画をかいてる、とか言つていたぞ。  
「ま、漫画・・・。そつなんだ。つてか、一体今から何を始めるの  
？」

「それは後だ。まず凛奈つれてこい。」

「ええ！俺が？」

「お前ボスだろ？」

「・・・それとは関係ないと思うんだけど。」

「つべこべ言わずにさつさと行け！」

そこで、リボーンの容赦ない蹴りが腰にアタック。ツナは廊下に放  
り投げられてしまった。

扉のむこうから「10代田ーー」と叫ぶ声がするがツナは  
無視した。

「はあ、つたく・・・・。凜奈ー！」

ツナが呼ぶとダダダッと凜奈が階段まで上ってきた。

「何、ツナ兄！今、B-L描いてて忙しいんだけビー。」

見ると、手には墨汁やシールみたいなものが張り付いている。

「はー? B-L! ついでに、リボーンが呼んでいるんだけど・・・。」

「へ、リボーンが?」

「うん、だから手、洗いなよ。」

「へ、あ! 本当だ! トーンが張り付いてるしー! 気をつけたつもりなのになー!」

そんなことを言いながら、洗面所に手を洗いに行つた。

すると2分くらいしてから、帰ってきた。

「ふう、お待たせ。ツナの部屋でいいの?」

「うん、・・・つていうか俺の部屋以外無こと! うか・・・。」

階段を上がり、ツナの部屋に行く。

扉を開ける。

「・・・なんで、みんながここに?」

「げつきやがつた! 変態女!」

「よつ、榊!」

「・・・。」

「極限にお前は誰なのだ？」

「また、沢田綱吉のマフィア関係者の方ですか？」

少し、いや、すぐ嫌なヤツがいるが、今は無視する凜奈。

「え、なんで？なんでツナの守護者たちがあつまつてんの？恭弥兄や、骸（一ノ口での扱いは変態）まで！」

「なんかさ、みんな、リボーンに呼ばれてきたらしこんだけど……。」

「へ、何か始めるの？リボーン。」

「ああ、名付けて『凜奈を元の世界に帰すための会議！』だぞ。」

「……え、別にここで住んでも良いけど？」

「凜奈、お前は異次元の世界の住人だろ？」

「ああ！そういうとなんか、格好いいね！」

「……脳天気だな。」

「今せつきから何を話しているのです？」

骸が聞いてきた。相変わらず綺麗なナップラーの髪型だ。……どうやってセットするのだろう。

「ああ、それはだな……。」

リボーンが今までの経緯を話した ドラクエっぽいねwww（作者の  
(声)

「……異次元からきたなんて、信じられる話じゃありませんね。

アルコバレー、あなたは

それを信じているのですか？愚かな……。」

「しうがねえだろ。」

「実際、マフィアの世界って信じられないようなものばかりだし。

「10年バズーカとか……。」

ツナが囁く。

「まあ、信じてあげましょ。」

「……ねえ君、強いの？」

「恭弥兄、話が脱線してるよ。」

「そんなことどうでもいいよ。僕は強ければいい、それだけだよ。」

「いいんだ……。」

「で、どうなの？」

「ど、どうって言われても……。まあ居合道とか空手とか習って  
いたし、そこそこ強いと思つ  
けど……。これ、なんか話したような……。」

「ふうん。そう。」

するとまた、トンファーを振り下ろした。

「わあ！危ないよ、恭弥兄！」

あわてて受け止める。

「やっぱ、恭弥兄、うだよねー。うのつくしだよねー。でも私、Mじゃ  
ないし！痛めつけられるのは

苦手だし！どうかかってーと、ツナ兄にやつてもうつた方が萌え  
るし……！」

「な、なにいってんのー。凛奈ー。」

「いやー、ツナ兄が暴力を振るわれると、なんか萌えますー。」

「ふざけんなー！」

そんな一人の会話など、スルーするリボーンと雲雀。

「おい、雲雀。後でいつでも相手してやるから、凛奈には今は手をつけるな。」

「『今は  
つけるな  
』」

「『今は』ってことは、後でしていいってことだよね、赤ん坊？」

「ああ。」

「え、ちょ、リボーン！私、今手を怪我したら致命的なんだけれど・  
・・・」

「まあ、いいじゃねーか。漫画なんていつでも描けるだろ?」

「いや、今度の冬は出でたりと思つて……あ、でも一八歳未満は参考したいためだよ彌のね」

知り合いのお姉さんにだしてもらおうと思つて！印刷もしないと

「あの外、いつかいつやつも、元の世界にしか無いんじゃないのか？」

あくまつ・・・・・

そこで一瞬、時が止まつたような気がした。多分。

凛奈の絶叫が響く。

ちなみに凜奈は中1だが、絵がすごく上手い。もう、プロ顔負けだ。

「だから、その冬、三行かせるために、元の世界に帰そうと思つ

てみんな集まつたんだぞ。」

「え、 そうなの！？ ありがとう、 みんな！」

(絶対ちがつーーー。)

と、シナは心の中で凛奈を哀れんでいた。

多分、続く・・・と思つ。

帰るための会議とかなんとか。多分前編。（後書き）

「前回は寝て終わったのに、なんで、こんな話しあわせはじめるの？」

？普通

学校の描写から始めるんじゃないの？」

と、思った読者の皆さん。そこはスルーしてくさい！  
作者が、「あー、学校の描写だるーい。」と自分の都合でカットいたしました！

申し訳！」わこません！

ツ「本当だよ～。」

作「はうあつ！ツナ！？」

ツ「しかも凛奈つて普通にB」とか言つているし・・・。」

作「それは仕方ない（キララ）」

ツ「・・・作者の趣味？」

作「！決してそんなわけじゃない！ただ、その・・・B」だそう

！と思いつきで！ほら、過激な描写はないだろつー。」

ツ「・・・まあ、いいけど。」

作「あつほん！まったく、勘違いもよしてくれー！」

ツ「・・・じゃあ今回はこれで！次回も見てくれると嬉しいな！」

作「あ！それ私のセリフ！」

ツ「バイバイ！」

作「つーかツナ、お前何気にうだ（強制終了）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2819z/>

---

2次元トリップ！

2011年12月20日17時51分発行